
大好きだったよ

いぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大好きだったよ

【Nコード】

N3982T

【作者名】

いぬ

【あらすじ】

性転換注意！ 以前書いた二本の続き。完結編です。こちらもピクシブにも載せてます。

（前書き）

性転換ちゅーい！

前作とか見てないとわけがわからないかもめ！

前作「絶対に失いたくない」

前前作「明日も一緒に食べようね」

午前七時四十五分。

これは私が家を出る時間だ。別にその時間で決まっているわけでも願掛けというわけでもないのだけれど、何度も繰り返す時間軸で毎日同じように起きて行動をしていると自然と習慣付いてしまったのだ。

私が朝が弱いわけではないし、この時間で何か問題がおきた事もない。だから今までこのサイクルを変えようと思った事はないのだけれど、最近は少し時間をずらしてもいいかもしれないと思えてきた。

その考えの原因となった男子生徒が、アパートの前であくびをかみ殺しながら私を待っていた。

「おはよう、ほむらさん。今日も時間通りだね」

「……おはようございます」

私は挨拶だけを手短に終わるとその生徒——巴ミヤと並んで歩くこともなく学校へと向かう。その私を追うようにして付いてくるのが最近の日課になってしまっていた。

ことの発端は先日 の件。

私はあれ以来顔を合わせたいとも思わなかったのだけれど、相手はそうではなかったらしい。学校のある平日は毎日こうして私を待ち伏せているし、土日になってもどこで知ったのか、私の携帯電話に連絡を入れてくるのだ。その連絡とは「魔女を探すパトロールでもしないか」といった類のもので、以前に私がきっぱりと断った共同戦線の申し入れだった。

当然私はその連絡も断っているし、平時の魔女探しも一人で行うようにしている。場合によっては時を止めてまで巴ミヤと接触しないようにまでしてる。だと言うのに彼は私が魔女を倒しているところに颯爽と現れては私の邪魔をしていく。

文句の一つでも言いたいところだけれど、それも出来ない理由があった。

バマミヤが現れるとき、必ずといっていいほどあの男——鹿目円がそばにいるのだ。

バマミヤ曰く、「鹿目君と一緒に行動していると何故かほむらさんのところに辿り着くね」だそうだ。

円はあの日からというもののバマミヤと妙に仲が良い。勿論それ自体は悪いことじゃないのは理解しているのだけれど、もしかするとそれを利用してはいないかと勘繰ってしまう。私の連絡先ももしかしたらあの子が勝手に教えてしまったのかも知れない。

そもそも何故円は私の近くに、もっと言えば魔女に近付いていつてしまうのだ？ もしかして円専用のレーダーでも兼ね備えているのではないでしょうね？

と、半ば本気で円に問いただしたことがあるのだけれど、「うん、なんでだろ？ こっちの方にほむらちゃんがいるかもしれないあと思っていてと本当に会っちゃうんだよねえ」などと言われてしまった。私はもう何も言い返せなかった。

学校に近付くとにわかに周囲が騒がしくなる。それと同時に私へと突き刺さる視線も増えてくる。

原因は分かっている。私の後ろを付いて歩くこの男だ。

只でさえバマミヤの事を慕う女子生徒が多い。端正な顔立ちに長身。その上気配りまで良く出来ると、私たち二年の教室にまでその噂が届くほどだ。そんな人気者が一介の女子生徒でしかない私に付きまとい、その上毎日登下校を共にしているともなればその噂に尾ひれ背びれが付いて回る。いつだったか、私の下駄箱に脅迫文のよなものが入っていた事があった、といえばその凄まじさの何割かは分かるだろう。

はぁ、とそつと息を吐く。

私はあまり人に好かれる人間ではないとは重々承知しているし、

もう慣れている。自分の伝えたい事を上手く伝えれないことにやきもきすることもあれば、冷酷な自分を演じる事が出来る事に嫌気が差す事もある。でも、だとしてもやはり嫌われてしまう事は怖いし、悲しい。もっと素直に、そう例えば円のように自分の心に正直に生きる事が出来ればもう少し違った自分になれたかも知れないけれど、それももう今となっては夢物語になってしまった。

いつからだろう？

こうしてすべての事を客観的に見るようになってしまったのは。

何にも属さず。

誰にも頼らず。

ただ只管にまどかの為に。

だけど、それが叶ったことはいまだに無い。

一体何が足りないのだろうか？

何故私には彼女を救う事が

「おはよう、ほむらちゃん」

能天気な声が私の耳に届く。振り向けばいつの間にか円が私たちのそばに来ていた。

「マミヤさんもおはようございます。今日も背が高いですねえ。羨ましいです」

「おはよう鹿目君。今日も君は可愛いね」

「えへへ、そうですか？」

……いや、それは朝の挨拶としてどうなんだろう？ これは私がツッコミを入れたほうがいいのかしら？

「今日はあまり天気良くないですね。もしかしたら雨降るかなあ」

「そうかも知れないね。明日は随分荒れるみたいだし。ところで鹿目君は随分機嫌が良いみたいだけど、何かあったのかい？」

「へへ、分かります？ 実は新しい折り畳み傘を買ったのでそれが使える力もって思ったら少し楽しみなんです」

私の隣に当たり前のように並び嬉しそうにそういう円。気持ちは分からなくもないのだけれど、男子としてそれはどうなのだろうか。

円が来てからと言うもの、バマミヤも嬉しそうに会話を弾ませている。もしかしたらずっと相手にしていなくて寂しかったのだろうか？ そう思うと少し悪い事をしてしまった気になってしまう。

しかし、と思う。

どうしてこの子はこのように不思議な雰囲気を持っているのだろう。私の知っているまどか、特に一番最初に出会った頃は確かに明るかったし、どこか自分に自信を持っているような感じがした。暗くてどんくさい私とは対照的だった。

でもこの円は逆に周りを明るくさせる。この子がいるだけであたりに花が咲いたように賑やかになるのだ。そう、丁度今のうちに。

先ほどまで私が考えていた事などどこかへ行ってしまう、今私が思考を巡らしているのは『美味しいケーキの作り方』について本気で語っている二人をどうやって大人しくさせようかというものに代わってしまっていた。

放課後。とはいえ、現在の時刻は正午を少し回った程度。ただれどその明度は低い。

お昼前くらいから急に厚くなってきた鈍色の雲により太陽の光が遮られ始めているのだ。この様子を見れば、刻一刻と約束の時は近付いてきているようだった。

朝私達が学校へ入ると同時くらいに雨が降り始め、時間が経つごとにその雨脚は強まった。ついには大雨洪水警報が発令されこの日の授業は午前中で全て終了となり、私達生徒は各自下校と相成ったのだ。

だけど、そんな中にも関わらず私はいまだ校舎の中を歩いていた。すでに人気が無くなり教職員が忙しく動いているのがちらほら見える。私はその目から隠れるようにしてとある場所へと向かった。

その原因は二通のメールだった。

一つはバマミヤから。

もう一つは円からだ。

それぞれ別の場所に私を呼び出すメールを、何故かほぼ同時刻に送ってきていた。

最初は無視しようかとも考えたのだけれど、何か思惑があるかもしれないということで結局私はその呼び出された場所へと向かっているのだ。

着いた先は購買だった。

いつだったか、円と一緒に買ったパンはすでに売り切れている。あの日からと言うもの、あのパンは私のお気に入りとなっていて、学校へ来る一つの楽しみともなっていた。いわゆる色物系のパンなのだけれど、食べてみると意外に美味しかったのだ。

まあ確かにあの日のことが少なからず影響しているでしょうけど、それでも美味しいと思えるのはきつと私の味覚とたまたま合っただけなのだろう。

そんな事を思いながら、誰もいないカウンターを眺めていると私を呼び出した本人——円が声をかけてきた。

「ほむらちゃん……？」

円にしては少し暗めの声色。疑問系なあたり、私がこちらへ来るとは思っていなかったのかもしれない。

「何の用事だったのかしら？」

私は勤めて冷淡に言った。こんな風に簡単に偽れる自分に少し鬱になる。

「あ、うん……。ごめん、こっちに来ると思ってなくてちょっと驚いちゃった」

という事は、やはりあのメールはバマミヤと何らかの共謀があったのことだったのだろう。どちらが言い出した事なのかは分からないけれど、私の知らないところで何かしようとしているのは少し気味が悪く思える。

だけど、この円に何かが出来るような度胸があるのかしら？

先ほどから怯えた小動物のようにキョロキョロとあたりを見渡し

ている。これでは私が円を苛めているようではないか。

「用件なら手短にお願ひするわ。私はこれから用事があるの」

これは嘘だ。用事など、無いに等しい。あるとすれば、恐らく明日襲来してしまうであろう最悪の魔女に向けて幾ばくかの準備と心構えをする程度だ。

私は出来うるだけ冷たく円に接するようにした。そうすることで明日の決戦の日に付いて来られないようにするためだ。

だけど、そんな私の思惑を円はたった一言で瓦解させてしまった。おろおろとしているだけだった円が、何かを決意するように「うん」と頷くと私の目をいつものように真っ直ぐに見つめて、こう言った。

「ほむらちゃん……これからほむらちゃんのお家に行ってもいいかな？」

心臓が止まるかと思った。

私を見つめるその瞳はどこまでも澄んでいて、とても冗談を言っているような雰囲気ではない。

いきなり何を言い出すの？

馬鹿なことを言わないで。

頭では簡単に返答を言う事が出来る。でも、実際にそれを声に出すことが出来ない。口の中が渴いてしまつて気持ちが悪い。唾を飲みこめばその音がやけに大きく聞こえる。動悸がやけに激しくなり、そつえば私は半年も心臓の病気で入院していたんだと今更ながらに思い出してしまふほどだ。

「ほむらちゃん？」

「……………かつ」

「か？」

「……………勝手にしなさい」

「……………うん」

違う。こんな事を言いたかつたんじゃない。

断ろう。今からでも遅くない。

そういえば私の部屋は魔女の資料でいっぱいだった。およそ女の子らしい部屋ではない。その上片付けも出来ていない。

違う。そういう事でもないの。来てはいけない。入れてはいけないのだ。だってきつと部屋に入れたら我慢出来なくなる。

我慢？

私は――何をやろうとしているの？

途端、顔がカアッと火照ってしまふのが分かった。

私は馬鹿だ。一体何を期待しているというのだ。ワルプルギスの夜は近い。明日どこるか、もしかしたら今晚にも来てしまふかも知れないのだ。そんな事をしている場合では……

「ほむらちゃん」

その声にハツとなり顔を上げる。気付けば私は下を向き円の手を頼りに歩いていたのだ。

円の手？

私の手にはしっかりとした体温を感じ取っていた。それは私のものではなく、いつの間にか手を繋いでいた円の手の平。

「あ……」

「傘出すからちょっとゴメンね」

私の手から円の体温がスルリと抜け、ほんの少しの風が当たりその温もりが消えた。

名残惜しい。

そう感じてしまった自分に怒りを覚えてしまふが、

「はい、ほむらちゃん」

そう、再度伸ばされた手を見つめ、あろうことかそれを取り握ってしまった自分にそんな事を思う資格なんてないのだろう。

円の開いた傘はそんなに大きなものではない。円自身も小柄とはいえ、人間二人分を覆うには少し足りない。お互いの肩が濡れ、それを避けるために必然的に私達の距離はゼロになる。

「……」

「……」

私は何も喋る事が出来ず、ただ俯いて歩くだけ。円もまた何も喋ってくれない。いつもの調子で能天気話してくればまだ気が逸れるのだけれど、今日に限って無言だ。これでは余計に緊張してしまふ。だからといって私のほうから振る話題もない。お互いにただ黙って歩くだけだった。

ボツボツと傘を穿つ雨音がやけに耳に障った。

程なくして私のアパートに着いた。雨は一層激しさを増し、すでに靴の中に水が入り私のタイツも湿ってしまっている。円も同じようなもので、ズボンの裾の色が変わってしまっている。

私は無言で部屋の鍵を開けると、妙に重く感じるドアを開けた。

ここから先に誰かを入れたことは無い。

私は円にばれないように静かに深呼吸をすると、出来るだけ冷静に振舞った。

「どうぞ、上がって」

たったそれだけの言葉を発するのに必要とした労力は、もしかしたら今までで一番大きかったかも知れない。それくらいのものだった。

円を招き入れると私は資料でゴった返っている畳の間へ連れて行った。客間として使用出来るのがここくらいしか無いのだ。流石に私の部屋に入れる勇氣は——無い。

この散乱している資料をバマミヤが見れば、これらが全てワルプルギスの夜に関係するものだと感じくかも知れなかったが、魔女に関する知識が乏しい円なら大丈夫だろう。

そう思っていた私が甘かったことはすぐに分かった。

「ほむらちゃん。この資料って、魔女のものだよな？」

お茶を用意していた手が震え、若干お盆に零してしまった。

「……そうね。魔女の事を知ること私の——魔法少女としての仕事だから」

動揺を見せないように、それだけを意識してお茶を置く。手の震

えも声の震えも無理やり押さえ込み、私はさりげなくその資料を円の目から離そうとした。

「今日の天気も、その魔女が影響してるんだよね」

息が止まり、手に持った資料が全て畳に落ちた。

「キュウベえから聞いたんだ。これから凄く強い魔女が出てくるんでしょ？　今までの魔女とは比較にならないくらいいの」

キュウベえ、最近見ないと思ったたらきっちり円を勧誘しようと策を凝らしていたのね。

きつと誤魔化しは効かないだろう。そんな事をすれば円を不安にさせるだけだ

「……そうね。その通りよ。この資料も全てその魔女のもの」

ここは下手に嘘を付くよりは、ある程度本当の事を話しておいたほうが正解かもしれない。

「私はずっとこの日の為に準備をしてきたわ。全てはこの魔女を倒すために」

今回の世界は、確か私の知っている”まどか”のいない世界だった。でも、だからといって私は手を抜いていたわけではない。どんな世界であろうと、私は”まどか”を救って見せると誓った。そのためだけに生きている。

私は落としてしまった資料をまとめると、部屋に置いてあるファイルに全て閉まった。もう何度も、穴が開くくらい見てきた資料だ。今更広げておく必要もない。

「そして——”まどか”ちゃんを助けるため、だね」

今度こそ心臓が止まるかと思った。

鋭利なナイフで胸を抉られる様な感覚。眩暈がする。

「何を、言い出すのかしら……？」

声がかすれる。上手く喋れない。頭が——痛い。

「いいんだよ。それがほむらちゃんのやるべきこと。守りたい人を守って欲しいんだ」

「……やめて」

いや。それ以上聞きたくない。

「だからボクの事は気にしないで。ほむらちゃんはほむらちゃんのやりたいことを」

「やめてよ!」

円の言いたい事。

私が考えたくなかった事。

必死に頭から消し去ろうとしていた事実。

それはこの世界を——円という自分自身を見捨てて私に時間を繰り返させ、今度こそ”まどか”を救って欲しいというもの。

この私に——自分を見殺せといっている……!

——頭が痛い。目頭が熱い。

気付けば私は大粒の涙を流していた。

「お願いだから、そんなこと言わないで……やめてよ……」

「うん……ごめんね」

円は私の隣に來ると、そっと私の頭を抱いた。

その手が優しく、暖かくて、今の私にはとても辛い。

どれくらいそうしていただろう。少なくとも私が泣き止むまではその体勢のままだった。

酷くみつともない姿を見せてしまった。とても申し訳ない気持ちだった。

「あのね、今日ほむらちゃんの家に来たかったのは、ちょっとお願いがあつたからなんだ」

「お願い?」

円が不意にそう言ってきた。顔を上げると息がかかるくらいの距離に円の唇がある。それがやけに艶かしく見えてしまい、私はまた顔を伏せてしまう。

「うん、あのね」

「明日の魔女、倒さないでほしいんだ」

「……え？」

「そうしたら、ほむらちゃんは戦わなくて済むし、この世界に残ってられる。僕と——ずっと一緒にいてほしいんだ」

「——っ!？」

それは紛れもない告白。先日の巴マミヤが言いかけたものとはわけが違う。破壊力が違った。私の決意を崩しかねないほどに。でも、

「それは……出来ないわ」

私は誓った。

どんな事があるうとも、何度同じ時間を繰り返そうとも。

「私はまどかを救いたいっ」

それは円にとっては残酷なことだ。でも、それでも私はまどかに逢いたい！ あの子を守りたい！

「……えへへ、フラれちゃった」

「え？」

表を上げ、円の顔を再度見上げる。そこには静かに涙を流す綺麗な顔。

「うん、分かってたんだ。ボクだって。きっとほむらちゃんはボクの願いを聞き入れないって」

「……」

ゴシゴシと涙を拭き、赤い目のままいつものように笑う円。その笑顔に私の胸は張り裂けそうだ。

「頑張つてねほむらちゃん。ボク応援してるから」

「……」

それに答える資格は私には無い。

円は携帯電話で迎えを頼むと、私のアパートからそっと出て行った。あの赤い目を見て母親が何を思うのか。今の私にはそれだけが気がかりだった。

そう、私は結局”まどか”という存在の事を軽く見ていたのだ。分かっていたつもりなのに。

あの子がどんな行動に出るかなんて……

どうして！

「えへへ、やっと恩返しが出来たね……」
どうしてっ！

「あはは、どうして泣いてるのほむらちゃん……ワルブルギスの夜はもういなくなっただよ……」

どうしてっ！！

「変だなあ、ボクはちゃんと”契約”したはずなんだけどなあ」

「どうして貴方はいつもそうなのっ！」

何で何でいつもいつもいつも！

「どうして私に貴方を守らせてくれないのっ！」

自分を犠牲にして、誰かを助けるなんて！

「何故私なんかを助けるのよっ！」

「えへへ、だって言ったじゃない？ 今度こそ”まどか”ちゃんを助けてねって」

それでも、それでも私はっ！

「私は円も助けたかったっ！！」

「へへっ、嬉しいなあ。やっと名前で呼んでくれた……」

どうしてなの？ 何故私はこの子を助けられないの？ 私に何が足りないというのっ！？

「ほむらちゃん、そんな顔しないでよ。ね、笑って？」

「そんなこと、出来るわけじゃない……」

「いいじゃない、ね？ ボクからの最後のお願い」

そんなこと、いわないで……。

「ほむらちゃん、笑って？ ボク、その顔が見たくて頑張っただよっ？」

馬鹿よ……、貴方って、本当に馬鹿……

「あはは、それじゃ笑い顔にならないよお……でもまあいいか。やつぱり……ほむらちゃんは笑ったほうが可愛いや」

お願いだから……もうやめて……

「はあ、何か疲れちゃった……」

「円……」

「えへへ、ほむらちゃん……今までありがとう……」

「円っ！」

「……大好きだったよ……ほむ、ら……ちゃ……」

「まどかぁ！！」

ピピピツと目覚ましのアラームが鳴る。

午前七時ジャスト。いつもの起床時刻だ。

顔を洗うと服を着替え朝食の準備。そしてそれを手早く終えると転校の書類等をまとめ、鞆に放り込む。

全ての支度が終わると鞆を持ち靴を履いてドアを出る。

午前七時四十五分。

いつもの登校時刻。

いつもの登校風景。

いつも通りに滞りなく転校手続きを終え、担任の早乙女和子に連れられ教室へ向かう。

中ではいつものように早乙女和子が嘆いていた。

馬鹿げた世界だと思う。

ふざけた運命だと思う。

だけど私はその因果を恨んだりはしない。

私は私の守るものを守ってみせる。

何度世界が繰り返そうとも！

「はい、じゃあ暁美さん。いらっしやい」

そう決意を新たに教壇に立ち、未来を見据えた。

こけるかと思った。

これは何？

どうということなの？

何故”まどか”と”円”が同じ教室にいるの？
わけがわからないわ！

「えっと、曉美さん？」

「いえ、何でもありません大丈夫です」

「そ、そう。ならいいわ。あそこの席に座ってもらえる？」

「……はい」

早乙女和子が指定した場所。それはいつもの場所とは違っていた。
「え、えっと。ヨロシクね。あの……ほむらちゃんって呼んでもいいかな？」

私の右隣にはまどか。いつものように少し怯えたようにそう聞いている。
てくる。

「ヨロシクね、ほむらちゃん」

その逆側。そう、いきなり慣れなれしく私の名を呼ぶのは円、ではない。

彼の名前は鹿目のどか。鹿目まどかの双子の弟、らしい。

のどかは和。和は輪であり円になる。中々どうして良く出来た世界だ。
界だ。

そして全く持って馬鹿げた世界だと思う。

本当に——本当に心の底からそう思う。

今度こそ終わり

（後書き）

あとがきという名の蛇足。

この最後の世界における各人物

・まどか：弟大好き人間。のどかはあたしのヨメになるのだったな

・のどか：ほむほむが気になるお年頃姉に逆らえない可愛そうな弟でもある

・ほむほむ：勝ち組きたこれ

・マミヤ：やつぱり男性化 ほむほむストーカーになりかける

・さやか：普通に杏子♂に寝取られる。魔女化どころか魔法少女にすらなっていない。

・杏子♂：普通にさやかを寝取ったイケメン。絶賛ラブラブ中

・キュウベえ：いつの間にかみんなから忘れ去れて現在やぐされ中。バーで自棄酒していたところを詢子ママと和子先生に見つかり意気投合。そのまま普通に飲み友達になる。

ちなみにこれらはまた別のお話ってことだよ！
書くつもりなんてないんだからねっ！

（・・ω・・）キリッ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3982t/>

大好きだったよ

2011年5月20日00時40分発行